



富山市教育センターだより

第43号

令和元年7月24日

富山市八人町5-17

T E L 076-431-4404

<http://www.tym.ed.jp/c10>

- 学校教育課発
- 教育センター発
- 初任者・新規採用教職員紹介
- 学校紹介

(題字「道」明瀬 正則)

「相関関係と因果関係」

富山市教育委員会教育長 宮口 克志

全国学力・学習状況調査の質問紙において、「自分にはよいところがあると思いますか」という質問に対して、「肯定的に回答した児童生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られる」という分析結果が以前から示されています。日本の児童生徒の自己肯定感、諸外国に比べて低い状況であり、学年が上がるにつれて徐々に低下していく傾向にあることから、多くの学校では子どもたちの自己肯定感を高める取り組みを推進しています。

ところで、児童生徒の自己肯定感を高めれば、学力が向上するのでしょうか・・・。

1986年以降カリフォルニア州において、「子どもたちの自尊心（自己肯定感）を高めれば学力や意欲が高まり、反社会的行為を未然に防止できるのではないかと期待して、州知事主導のもと自尊心に関する大規模な研究プロジェクトを始動させました。

しかしながらその結果は、自尊心を高めても反社会的行為の抑止にはつながらず、学力の向上もみられませんでした。つまり、自尊心と学力の関係はあくまでも相関関係にすぎず、因果関係はその反対で、学力が高いという「原因」が、自尊心の高まりという「結果」をもたらしているということです。

学力の向上が自己肯定感の高まりにつながりますが、学力の低い子どもに自己肯定感を高めようと働きかけることは、かえって逆効果となることも明らかになっています。例えば、悪い成績を取った子どもに対して「あなたはやればできるよ」などと自己

肯定感を高めるような対応ばかりを行うと、悪い成績を取ったという事実を反省する機会を奪い、自分に対して根拠のない自信をもったナルシストを育てることになりかねないということです。

また、褒め方についても配慮が必要です。「あなたは頭がいいね」など、その子の元々の能力に関することを賞賛された子どもたちは成績を落とし、「あなたはよく頑張ったね」と努力を賞賛された子どもたちは成績を伸ばしたという研究結果があります。

勉強でも運動でも、いつもよい結果ばかりとは限りません。元々の能力を褒めることは、結果が悪い場合には「自分は頭が悪く、能力がないんだ」と考え、子どもがやる気を損なうことにつながるのです。

女子マラソン金メダリストの高橋尚子選手ら多くのトップアスリートを育てた故小出義雄監督は、ご自身の指導法を「褒め殺し」と言っておられます。小出監督は「予定のメニューをすべてこなしてきたよ。これまでこんなにやり続けてきたんだ。だからきっと勝てる、大丈夫」などと、選手一人一人の練習過程における詳細な記録を基に、具体的に達成した内容を示しながら褒め、認め、励ますということを意識的に継続しておられました。

授業をはじめ、日々真摯に取り組んでいる教育活動を推進する際には、目的を明確にし、そのための施策や効果的な対応をしっかりと見極めながら実践することで、子どもたちの確かな成長につなげていきたいものです。